令和 3(2021)年エイズ発生動向 - 概 要 -

厚生労働省エイズ動向委員会

エイズ動向委員会は、都道府県等からの報告に基づき日本国内の患者発生動向を把握し公表している。本稿では、令和3年(以下、「2021年」と西暦で表記する。)1年間の発生動向の概要を報告する。2021年に報告された HIV 感染者は742件、AIDS患者は315件であり、HIV 感染者とAIDS患者を合わせた新規報告数は1,057件であった(図1)。累積報告数は、2021年末の時点ではHIV感染者23,231件、AIDS患者10,306件で計33,537件となった(図2)。集計には、凝固因子製剤による感染例は含まれていない。

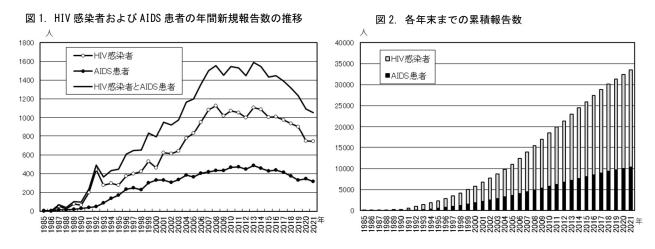
注)「HIV 感染者」: 感染症法の規定に基づく後天性免疫不全症候群発生届により無症候性キャリアあるいはその他として報告されたもの。

「AIDS 患者」: 初回報告時に AIDS と診断されたもの(既に HIV 感染者として報告されている症例が AIDS を発症する 等病状に変化を生じた場合は除く)。但し、平成 11(1999)年3月31日までの AIDS 患者には病状変化による AIDS 患者報告が含まれている。

1. 結果

(1)報告数

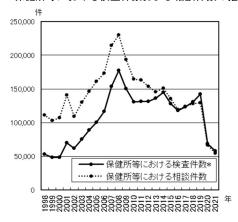
HIV 感染者年間新規報告数は、近年減少傾向となっていた中で、2020年は前年から153件減と大きく減少し、2021年は前年から8件減少し742件となった。AIDS患者年間新規報告数は、2020年に4年ぶりに前年より増加したが、2021年は315件であり、再び前年から減少した(図1)。HIV 感染者とAIDS患者を合わせた新規報告数に占めるAIDS患者の割合は29.8%であり、前年(31.5%)より減少したものの、2019年(26.9%)と比較し高い水準であった



(2)保健所等における検査・相談件数

2021 年の保健所における HIV 検査件数と自治体が実施する保健所以外の HIV 検査件数の合計は 58,172件(2019年 142,260件、2020年 68,998件)であった。2020年は前年より 73,262件減少し、2021年は前年から10,826件減少した(図 3)。

図3. 保健所等における検査件数および相談件数の推移

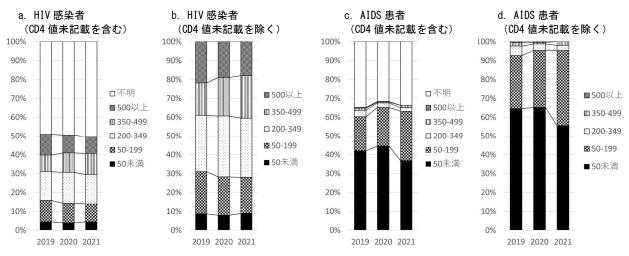


*保健所におけるHIV検査件数と自治体が実施する保健所以外の検査件数の合計

(3)CD4 値の分布

2019 年 1 月 1 日から発生届に診断時の CD4 値が追加された。CD4 値の記載のあった 2021 年 HIV 感染者 新規報告のうち、CD4 値<200/ μ L の割合は 28.0% (103/368) (2019 年: 30.9%、2020 年 28.2%) であった(図 4-b)。

図 4. 新規報告における診断時の CD4 値の分布

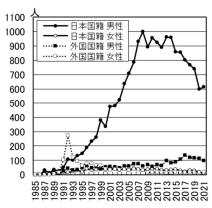


(4)性別、国籍別報告数

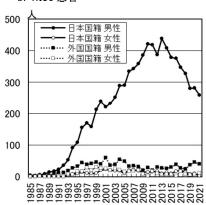
2021 年新規報告の性別、国籍別では、HIV 感染者および AIDS 患者のいずれにおいても、日本国籍男性が約83%を占め、その割合は前年より増加した。日本国籍男性の HIV 感染者年間新規報告数は2020 年に前年から過去最大の減少となったが、2021 年は8年ぶりに前年から増加した(図5-a)。AIDS 患者年間新規報告数は2020 年に7年ぶりに前年より増加したが、2021年は再び前年より減少した(図5-b)。日本国籍男性の次に年間新規報告数が多い外国国籍男性については、HIV 感染者、AIDS 患者ともに前年より減少した(図5-a,b)。日本国籍女性の HIV 感染者年間新規報告数は前年の半数以下に、AIDS 患者年間新規報告数は前年の3分の1以下に減少し、近年と比較して報告数が少なかった1990年前後の水準となった。HIV 感染者年間新規報告数は2003年以来、AIDS 患者年間新規報告数は2011年以来、初めて外国国籍女性の年間新規報告数を下回った。

図 5. 性別、国籍別年間新規報告数の推移

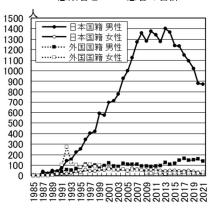
a. HIV 感染者



b. AIDS 患者



c. HIV 感染者と AIDS 患者の合計

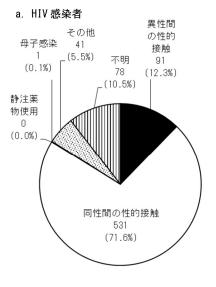


(5)感染経路別、年齢階級別報告数

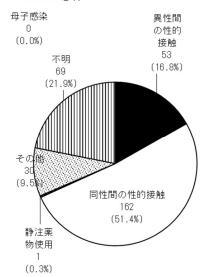
2021 年新規報告を感染経路別にみると、HIV 感染者、AIDS 患者のいずれにおいても、同性間性的接触が半数以上を占めた(図 6-a, b)。母子感染が 1 件、静注薬物使用が 1 件(その他に含まれる他の感染経路と静注薬物使用の両者の可能性があるものを合わせると計 4 件)報告された(図 6-c)。

2021 年新規報告を年齢階級別にみると、HIV 感染者では 30-34 歳が最も多く、次いで 25-29 歳が多かった。 AIDS 患者では 40-44 歳が最も多く、次いで 45-49 歳が多かった(図 7-a,b)。 年齢の高い層および AIDS 患者では、若年層および HIV 感染者と比較して同性間性的接触(男性)以外の感染経路の割合が高い傾向があった(図 7-a,b)。

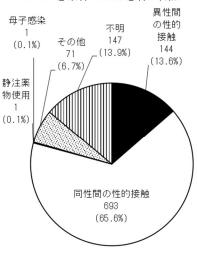
図 6. 2021 年新規報告の感染経路別内訳



b. AIDS 患者

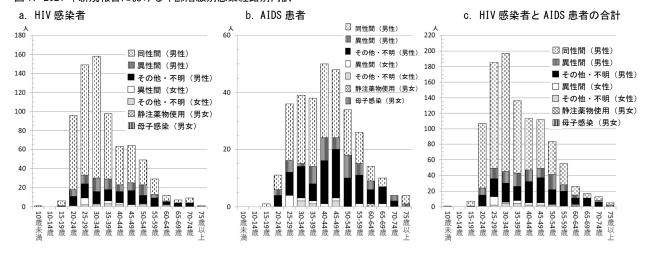


c. HIV 感染者と AIDS 患者の合計



*同性間の性的接触には両性間の性的接触が含まれる。その他の感染経路には、発生届で「その他」にチェックされたもの(2019 年 1月1日からの発生届の変更に伴う1性的接触のウ、不明にチェックされたものも含まれる)に加えて、輸血などに伴う感染や可能性のある感染経路が複数ある例(同性間の性的接触と静注薬物使用のいずれかなど)が含まれる。なお、2018 年までの発生届には性的接触であるが同性間か異性間か不明な場合の欄がなく、この場合、「その他」にチェックされ、その旨自由記載されることがあり、感染経路その他に分類されていた。HIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告における感染経路その他の件数の推移は 2016 年 39 件(うち性的接触の不明 11 件)、2017 年 44 件(うち性的接触の不明 19 件)、2018 年 35 件(うち性的接触の不明 16 件)、2019 年 62 件(うち性的接触の不明 19 件)、2019 年 19 件(うち性的接触の不明 19 件)、19 件(うち性的接触の不明 19 件)のあった。19 年 19 件(19 年 19 件)のあった。19 年 19 件(19 年 19 件)であった。19 年 19 件(19 年 19 件)のあった。19 年 19 年 19 件)のあった。19 年 19 年 19 年 19 件)のあった。19 年 19 年

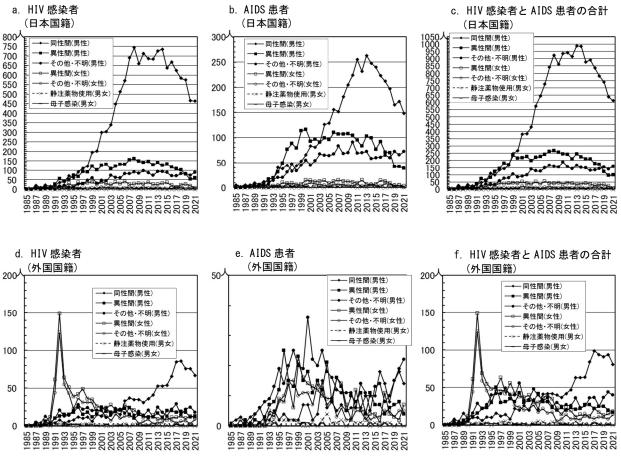
図 7. 2021 年新規報告における年齢階級別感染経路別内訳



(6)感染経路別、国籍別年間新規報告数の推移

日本国籍の HIV 感染者年間新規報告数(図 8-a) について、同性間性的接触(男性)が 2020 年に前年から過去最大の減少となったのに対し、2021 年は前年からほぼ横ばいとなった。日本国籍の AIDS 患者年間新規報告数(図 8-b) について、同性間性的接触(男性)は 2020 年に 7 年ぶりの増加となったが、2021 年は再び前年より減少した。外国国籍の HIV 感染者年間新規報告数(図 8-d) について、同性間性的接触(男性)は前年より減少した。外国国籍の AIDS 患者年間新規報告数(図 8-e) について、同性間性的接触(男性)、異性間性的接触(男性)、異性間性的接触(男性)、異性間性的接触(男性)は増加した。

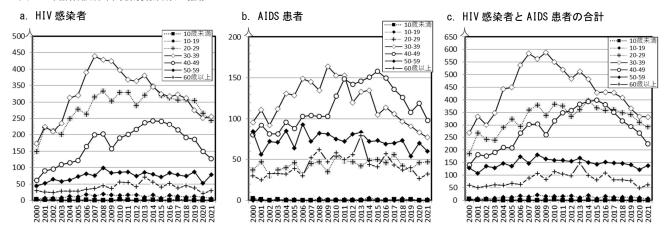
図 8. 感染経路別、国籍別年間新規報告数の推移



(7)年齢階級別の年間新規報告数の推移

年齢階級別年間新規報告数の推移(図 9)を示す。2021 年 HIV 感染者年間新規報告数は 30-39 歳、50-59 歳、60 歳以上で前年より増加した。50-59 歳の HIV 感染者年間新規報告数は、各年齢階級の中で、2021 年は前年から最も大きく増加した。2021 年 AIDS 患者年間新規報告数は 10-19 歳、20-29 歳、60 歳以上で増加した。

図 9. 年齢階級別年間新規報告数の推移



(8)推定される感染地域および報告地

2021 年新規報告の推定感染地域について、HIV 感染者の 81.7%、AIDS 患者の 67.3%が国内感染であった(表 1)。

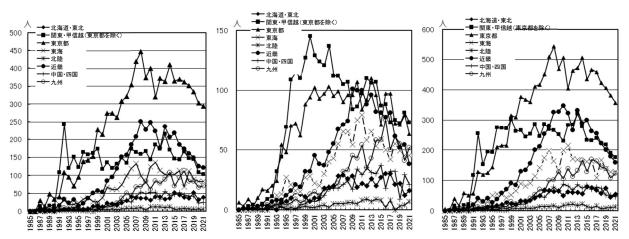
報告地(ブロック)について、2021 年 HIV 感染者年間新規報告数は北海道・東北、中国・四国、九州で前年より増加し、東海では前年と同数、その他の地域では減少した(図 10-a)。2021 年 AIDS 患者年間新規報告数は北海道・東北、北陸、九州で前年より増加、東海では前年と同数、その他の地域では減少した(図 10-b)。

図 10. 年間新規報告数の報告地 (ブロック) 別推移

a. HIV 感染者

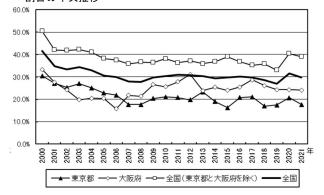
b. AIDS 患者

c. HIV 感染者と AIDS 患者の合計



HIV 感染者とAIDS 患者を合わせた新規報告数に 占めるAIDS 患者の割合の年次推移を図11に示す。 東京都では17.6%(前年20.7%),大阪府では24.1%(前年24.3%)、全国平均では29.8%(前年31.5%)であり、 東京都、大阪府を除くと39.0%(前年40.5%)であった。

図 11. HIV 感染者と AIDS 患者新規報告数に占める AIDS 患者の割合の年次推移



2. まとめ

2021 年の新規報告数は、HIV 感染者 742 件、AIDS 患者 315 件、HIV 感染者と AIDS 患者の合計 1,057 件であった。HIV 感染者と AIDS 患者の年間新規報告数はいずれも近年減少傾向となっていた中で、HIV 感染者年間新規報告数は、2020 年は前年から 153 件減と大きく減少し、2021 年は前年から 8 件の減少となった。AIDS 患者年間新規報告数は 2020 年に 4 年ぶりに前年より増加したが、2021 年は再び前年より減少した。2021 年のHIV 感染者と AIDS 患者を合わせた新規報告数に占める AIDS 患者の割合は 29.8%であり、前年より減少したものの 2019 年の 26.9%と比較し高い水準であった。保健所等における検査件数は、2020 年に前年の半数以下に減少し、2021 年は前年よりさらに減少した。新型コロナウイルス感染症の流行に伴う検査機会の減少等の影響で無症状感染者が十分に診断されていない可能性に留意する必要がある。

国籍別にみると、HIV 感染者および AIDS 患者のいずれにおいても、日本国籍男性が約 83%を占め、その割合は前年より増加した。近年、外国国籍男性の占める割合が増加傾向であったが、2021 年は HIV 感染者、AIDS 患者ともに外国国籍男性の占める割合は減少した。

性別では HIV 感染者新規報告、AIDS 患者新規報告のいずれも男性が 95%以上を占め、感染経路については、HIV 感染者の 71.6%、AIDS 患者の 51.4%が同性間性的接触と報告された。また、母子感染は前年と同じ 1件、静注薬物使用は 1件(その他に含まれる他の感染経路と静注薬物使用の両者の可能性があるものを合わせると計 4件)報告された。日本国籍女性の HIV 感染者年間新規報告数、AIDS 患者年間新規報告数はともに前年の半数以下に減少し、1990年前後の水準となった。日本国籍女性の HIV 感染者年間新規報告数は 2003年以来、AIDS 患者年間新規報告数は 2011年以来、初めて外国国籍女性の年間新規報告数を下回った。

年齢では、HIV 感染者新規報告数は 20 歳代と 30 歳代が多く、若年層に重点を置いた予防啓発が引き続き 重要である。AIDS 患者年間新規報告数は前年までと同様に 40 歳代が最も多かった。高年齢層では AIDS 患 者として報告される件数の割合が高い傾向にあることから、高年齢層においても検査の機会を十分に提供する 必要がある。

報告地(ブロック)に関して、HIV 感染者年間新規報告数は北海道・東北、中国・四国、九州で前年より増加した。AIDS 患者年間新規報告数は北海道・東北、北陸、九州で前年より増加した。大都市圏以外では、HIV 感染者と AIDS 患者の新規報告数の合計に占める AIDS 患者新規報告数の占める割合が高い傾向にあった。報告数の多い大都市圏での感染拡大防止に向けた対策を引き続き行うとともに、新規報告数に占める AIDS 患者の割合が高い地域では早期診断に向けた更なる対策が求められる。それぞれの地域における HIV 感染者及び AIDS 患者の発生動向の特性に合った対策の展開が望まれる。

国内で 2020 年 1 月に初めて報告された新型コロナウイルス感染症の流行に伴う検査機会の減少等の影響で無症状感染者が十分に診断に結び付いていない可能性に留意する必要がある。HIV 感染者、AIDS 患者の早期診断、早期治療のために検査の必要性を広報し、多様な場面での検査機会の提供、および自治体での検査体制をより充実させることが求められる。

引き続き、エイズ予防指針に基づいた予防対策、相談・検査を受けやすい体制の整備等を進める必要がある。